

CBSスペシャル座談会

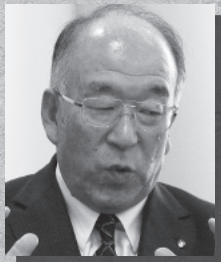
レッドブル

# 白門×福島×エアレース 福島への未来への メッセージ

今年度で10周年を迎えた中央大学ビジネススクール(CBS)では、次の10年を見据えたビジョン「中央大学ビジネススクール NExT10」を始動しています。このビジョンでは、不確実性の時代を拓いていく“チェンジリーダー”になり得る人材の育成を目指しています。今回、まさにその人材であるとともに、震災後の福島の復興にゆかりのある学员(卒業生)3人を招き、「福島への未来へのメッセージ」をキーワードに思いを語っていただく“スペシャル”な座談会を実施しました。 19Pへ続く



## ★出席者、略歴



**高橋雅行氏**  
(昭52法)

福島民報社代表取締役  
社長、福島白門会支部  
支部長



**室屋義秀氏**  
(平8文)

レッドブル・エアレー  
ス・パイロット、レッド  
ブル・エアレース・ワー  
ルドチャンピオンシッ  
プ2017年間王者



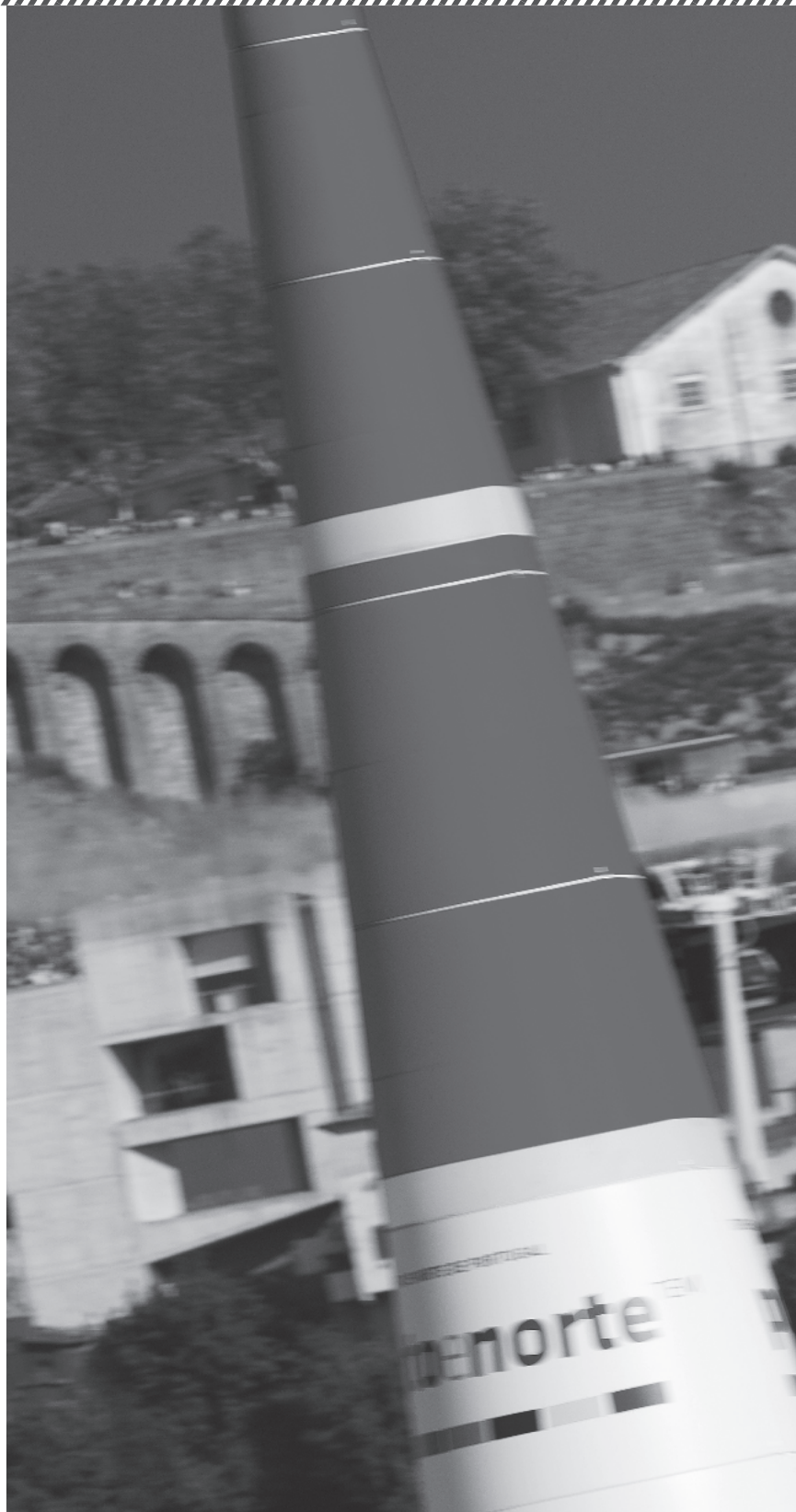
**岡崎慎二氏**  
(CBS・3期生)

株式会社銀嶺食品代表  
取締役社長



**ファシリテーター**  
**杉浦宣彦氏**

中央大学戦略経営研究  
科(CBS) 教授







レース中の室屋選手=(c) Taro Imahara/TIPP

後半には中大航空部の学生5人も加わり、先輩でありレッドブル・エアレースのワールドチャンピオンである室屋氏と交流を図りました。(白門OBの情報紙・学員時報501号〈2018年3月25日号〉より転載)

## それぞれの福島

**杉浦** 今回は中大と福島に縁がある方々に集まっていただきました。福島とのかかわりを教えてください。

**高橋** 私は生まれも育ちも福島です。中大卒業時は、福島に戻ることありきで進路を考え、いまの福島民報社に入りました。もともと、新聞記者になるのが夢だったので。

**杉浦** 福島で生まれ育ったのは高橋社長だけなんですよ。『福島歴』では、次に長いのは室屋さんですか。

**室屋** はい。私は中大杉並高から中大に進みましたが、勉強せずに航空部の活動に全精力を注いでいました(笑)。卒業後はしばらく関東にいましたが、1998年(平成10年)に「ふくしまスカイパーク」(福島市)ができたことをきっかけに、そこをベースに活動を広げました。

**杉浦** 岡崎社長はCBSで私のゼミ生でした。福島歴は7年ですよ。

**岡崎** 生まれは長野市です。いまは珍しいですが、父が俗にいう転勤族だったので、幼少期は全国各地で育ちました。学部は他大学の経営学部を卒業し、中大卒ではありませんが、就職のために上京したのが2003年(平成15年)です。2010年(平成22年)にCBSに入り、在学中に東日本大震災が起きました。ご縁が重なり、福島で学校給食を中心にパン・菓子を製造する銀嶺食品という会社の社長にいきなり就任することになったのです。震災の影響で経営が厳しく

なっているうえ、福島で右も左もわからないなか、杉浦先生に相談したり、高橋社長にもいろいろと助けていただき、ここまでやってきました。

### 福島は次のステージへ

**杉浦** 私も祖父母が福島県郡山市出身ですし、「ふくしま市食品加工産業創出研究会」の座長を含め、福島関連の仕事も多く、月3回は福島に行く「福島漬け」の生活です。法学部で持っているゼミの合宿も隔年で福島で行い、今年もその予定です。さて皆さんは、福島の現状をどうぞ覧になっていますか？

**室屋** 初期の復興はある程度終わり、未来をつくるステージに入ったと感じています。でもやっぱり、震災と原発の影響がありますから、他県とは違うやり方でないといけません。キモになる、熱い火の玉みたいな、ちょっとびっくりするものが必要ではないでしょうか。私は航空関係しか能力がありませんから、その分野で子どもたちに貢献していきたいですね。具体的には、展示場や教室を開催することで子どもたちが航空に興味を持つきっかけをつくったり、ふくしまスカイパーク内に小型機の操縦訓練がおこなえる環境を用意したり。少しずつ芽が見え始めているところです。

### 会津若松市

**高橋** 室屋さんが拠点にしているスカイパークは、かつての農道空港です。採算が取れず、その役目を終えようとしているときに、室屋さんが息を吹き返してくれました。人は動いていると新しいものを生み出だし、新しいものを生み出した人には新しい輪が加わってくるものです。スカイパークは単なる練習場ではなく、これからの新しい産業をリードする新たな拠点になりつつありますね。

**岡崎** 私も、復興という意味ではある程度終わったという印象を持っています。いまはもう前を向くしかないし、現状起きていることを解決していこうと動いているところではないでしょうか。震災後、福島にはたくさんの人と資本が投下されました。食品加工業でも、最新の設備をたくさん投資していただいた。そこに乗るかたち



福島市

これを育てていかないと、理想を語っても、誰も住んでくれませんよね。とりわけ一次産業がない国には人口増もないし、国の発展もありません。ですが、地域のつながりがなければ一次産業はできません。もっと一次産業を大事にすれば、地域の隅々まで人が住み、またほかの産業を生んでくれると思います。

岡崎 日本で一次産業をつくるというのはすごく難しい。あまりにも大切にされてこなかった歴史があるんです。都内では国産のものが高いという印象がありますが、地方では逆に価値がつかないということが起きています。このミスマッチは何なんだろう、と。そういったところを変えていかなければいけませんよね。

## 福島の“正常化”を 世界に発信

杉浦 実は福島は、仙台と東京、両方の都市をビジネスの相手先として見ることができる珍しい場所です。大宮からだ、と、新幹線で1時間。寝ていられないくらい近いです(笑)。

高橋 社会インフラ、交通網でいったら間違いなく日本一なんです。新幹線、空港に加え高速道路が4本通っている。ここをもっとアピールしていかなければなりません。そのための工夫と努力が必

要です。控えめな県民性ですが、プライドを持って積極的に動かなければいけないと思う。

岡崎 おっしゃるとおり、立地的な優位性から、福島はとても可能性があります。一次、二次、三次産業が30分圏内にぎゅっとまとまっているのは珍しい。日銀のすぐ近くに畑があるという風景は、ほかにはなかなかありませんよ。産業が生まれるべくして生まれる立地環境であると思っています。

杉浦 福島は「白河の関を越えたら」どこか違うところなんて発想はもう捨てて、大消費地への供給地であっていいわけですよ。また福島のなかでも、地域によっては“復興モード慣れ”しているところがある。ですから、私はまず福島の“正常化”をしなければならぬのではないかと考えています。もう普通の状態に戻ってきたのだから、もっと普通にやっつけていこうよ、ということです。室屋さんは海外のインタビューでもよく福島を話題に出しておられますが、周囲の反応はいかがですか？

室屋 震災直後は「フクシマ」と言うだけで、「うわっ、大丈夫？」なんて聞かれましたが、いまは何も反応がありませんから、福島が“正常化”されつつあるという証かもしれません。

杉浦 エアレースはとてもお金のかかるスポーツですよ。室屋さんも安定したスポンサーを見つけられるまで大変ご苦労されたと聞いています。でも、福島を拠点にしているチームが世界大会で優勝することで、そこに大きな経済力が存在していると世界に示せたのではないのでしょうか。これを正常

で、“福島モデル”をシステム化して確立し、世界に向けて発信する展開になったらおもしろいですよね。私が取り組んでいる六次産業化(一次産業が食品加工・流通販売にも業務展開する新しい産業)は、そういう観点から、食と工業を結び付け、新しい流通の仕組みや企画をつくっています。

高橋 福島は広いですから、震災や原発事故の影響を直接受けた地域と、それ以外の地域を同じに語るのはちょっと難しいのです。それに震災前から少子高齢化や市への人口集中など、他県と同じような問題を抱えていました。震災による環境から脱しようとしているだけでは、元気になれません。地方に必要なのは、地域に合った産業を元気にするという事に尽きると思います。それは人間としての生きがいであり、生活の糧です。

郡山市

白河市

化と呼ばずして、なんと呼ぶのかと思いますよ。それに、室屋さんのご発言からは“福島愛”が感じられます。

**室屋** 海外のエアレース・パイロットには、実家が飛行場だとか、恵まれた環境の方も多くいます。私はゼロからスタートしなければならぬなかで、福島の方にたくさん助けていただきました。思い返せば返すほど、感謝しかありません。得たものの成果が大きいということは、それ以上のものをもらっているということ。きちんと返さないと、罰が当たります。だから地元貢献するといった感覚ともちょっと違いますね。でも高橋社長みたいな方は「返します」と言っても「いらない!」とおっしゃる(笑)。だから、その分は次世代に渡していこうかな、と。

**高橋** 室屋さんは世界へのメッセージャーですね。地球儀で見たら点でしかない福島の“正常”が、世界に伝わり続ける。これはやろうと思ってもなかなかできないですよ。室屋さんが所属しているふくしま飛行協会は地域おこしも熱心にやっていますし、地元の産品を大事にしようとしている。そこに岡崎社長の銀嶺食品も絡んだら、いいふくらみが出るのではないのでしょうか。杉浦教授というすばらしいバックボーンもいらっしやいますから、新たな連携プレーに期待しています。

**岡崎** 実業とアカデミックのつながりは理想形ですよ。産業界として、産学連携というかたちでやっていければと思っています。

**高橋** それに白門の愛着だけで、これだけのつながりができる

ということを、この年になっても感じています。岡崎社長も室屋さんも、福島のシンボルであり、白門のシンボルです。

## 空の限界点で戦う ということ

**杉浦** ここからは航空部の学生も交えてエアレースのお話を聞いてみたいと思います。「レッドブル・エアレース・ワールドチャンピオンシップ2018」シーズン開幕戦の決勝レースがアブダビで2月3日(現地時間)に開催され、室屋さんは2位でしたね。

**室屋** 結果は2位でしたが、ほぼ完璧なレースでした。でも実は飛行機が完成せず、クリスマスもお正月もなくぶっ続けで作業していました。どこまでチャレンジすべきか、というところですね。テレビ中継だと楽勝に見えるかもしれませんが、世界レベルのものに“楽勝”はありません。

**杉浦** エアレースにはオーバーG(飛行時の重力加速度が0.6秒以上10G<上限12G>を記録すること。その瞬間に失格になる)というものもありますよね。

**室屋** 我々は、もっともオーバーGをしてきたチームです。気合いと根性で、練習ではギリギリまでいくのですが、本番ではちょっと力が入ってしまう。それを克服するために、操縦桿の動かし方や、筋肉の反応速度の計算など、さまざまにトライ・アンド・エラーを繰り返しました。

**杉浦** 勝つための戦略やイメージトレーニングも重要ですよ。

**室屋** イメージがないと絶対に

うまくいきません。飛んでいるときは、その場で考えてから行動する時間はありませんから。正確に計算して、それをイメージしておく。角度を正確に合わせ、次の瞬間の視線はここ、次にG(重力)がかかってくるから酸素を補給して、体に力を入れて、操縦桿は2ミリの戻して…そんなイメージです。そして、イメージしたものとのズレを探すわけです。間違い探しをやっている感じですね。いかに正確に、調整しながら、考えていたとおり(戦略どおり=イメージどおり)に飛んでいけるか、それまでの練習を含めた積み重ねが重要です。

**学生** Gがかかっているとき、意識はどうなっているのですか？

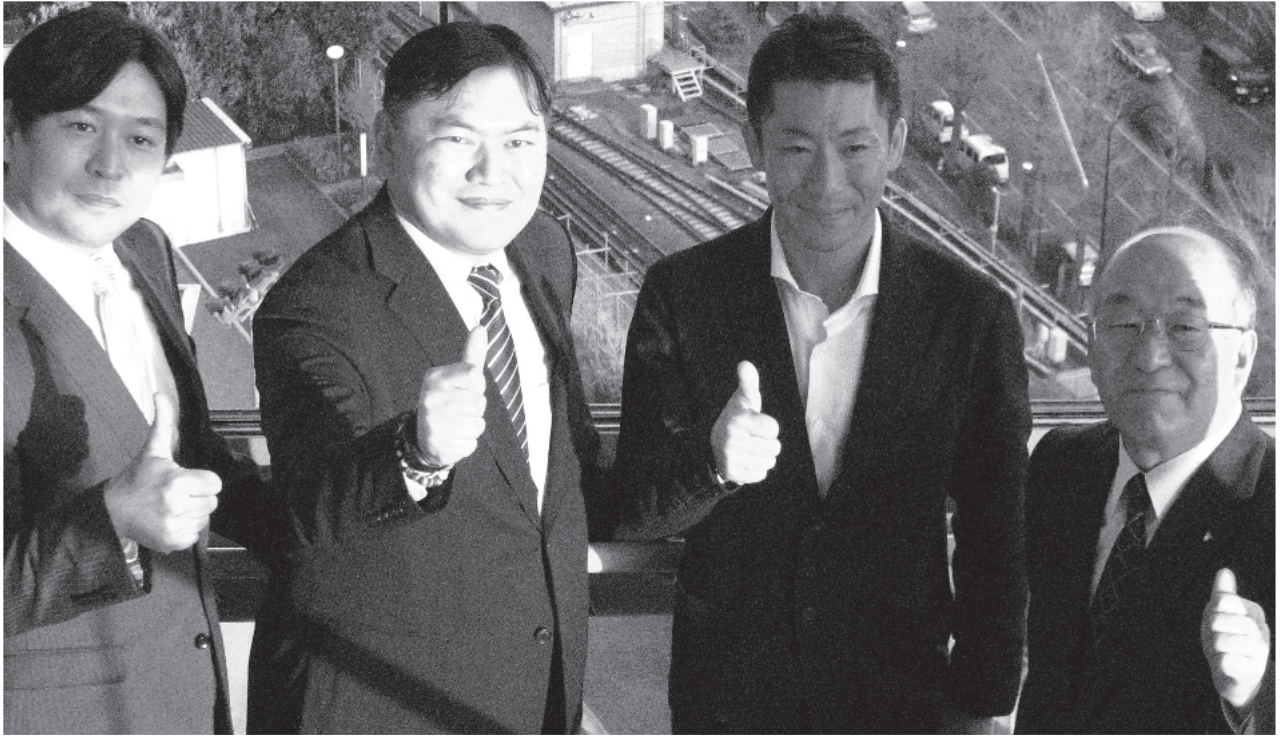
**室屋** 意識はあるけれど、酸素量が減っているから、判断能力が落ちています。10Gだと、もうハンマーでぶっ叩かれたぐらいの衝撃。その瞬間、筋肉をどう動かすか、

## レッドブル・エアレースとは

レッドブル・エアレースは、飛行機の飛行技術や機体性能を競うモータースポーツである。パイロットは最高時速370km、最大重力加速度12Gという極限の環境のなか、操縦技術の正確さはもちろん、知力、体力、精神力を尽くしてタイムを競い合う。まさに“空の限界点”で戦うスポーツである。

2003年(平成15年)から国際航空連盟公認レースとして開かれている「レッドブル・エアレース・ワールドチャンピオンシップ」はレースシリーズであり、世界各国をめぐる、各開催の順位に応じてポイントがつく。年間でもっとも多くポイントを得たパイロットがチャンピオンとなる。





座談会出席4人による集合写真



コックピットで笑顔を見せる室屋選手=(c) Taro Imahara/TIPP



## ■レッドブル・エアレース・パイロット、室屋 義秀氏

中大杉並高から1991年(平成3年)に中大文学部に入学。グライダー部に入部し、20歳のときに飛行機操縦免許を取得するため単身アメリカへ。グライダーの飛行訓練に励みつつ、24歳で世界有数のエアロバティックス教官ランディー・ガニエ氏に師事。“操縦技術世界一”の夢に向かって進み始めた。

2009年(平成21年)、アジア人で初めて「レッドブル・エアレース・ワールドチャンピオンシップ」に参加。そして2017年(平成29年)の同チャンピオンシップにて、米サンディエゴでの第2戦、母国日本・千葉の第3戦、またドイツ・ラウジッツでの第7戦、米・インディアナポリスでの第8戦でも連続優勝し、悲願

のワールドチャンピオンタイトルを獲得した。

そして今年のチャンピオンシップは2月に第1戦のアラブ首長国連邦・アブダビ大会が行われ、室屋氏は2位。第2戦はフランス・カンヌで4月に、第3戦は日本の千葉で5月に開催された。5月時点では年間総合ランキング3位。

チャンピオンシップで戦う一方、「ふくしまスカイパーク」を拠点とし、国内でエアショーの開催や子ども向け航空教室を行うなどの活動にも尽力している。昨年度に続き、今年度も学員会会長賞受賞。福島白門会支部にも所属している。

そして酸素がなくなってくるので、どこで息継ぎをするのか。機内も50～60度と暑いので、水分もなくなっていく。脱水対策も含めて、限界点で戦っています。

**岡崎** すごい世界です。Gに耐えるのは、訓練でどうにかなるものなんですか？

**室屋** 訓練で慣れてくるということもあります。物理的な我慢は難しいですね。事前に準備をしておかないと、耐えられない領域です。そういう状態だから、結構ミスとかが出るんですよね。それが0.1秒の差になって、負けてしまう。

**高橋** エアレースは1,000分の1秒を争う世界なんですよ。

**室屋** はい。エアレースにおいての1,000分の1秒は、たった10分です。

**杉浦** 室屋さんのようなエアレース・パイロットでグライダー出身というのは、珍しいのでは？

**室屋** そうですね。グライダーは上昇気流を拾いながら、空気や

雲、地上の熱、風とか、いろいろなものを計算し、それらをいかに効率よく使っていくかというスポーツです。空を見ながら、雲のでき始めを探していきます。その下には上昇気流があるので、イチかバチ

かでそこに突っ込んでいく。自然のことをよく勉強していないとできませんし、体力と度胸も必要です。私もやりたいのですが、同時にはできないので、老後の楽しみに取っておきます(笑)。